

## 語りえぬものを語る言葉

### ——メルロ＝ポンティと超越論的言語の問題——

佐野泰之

オイゲン・フィンクは、1933年に『カント研究』誌上で発表した有名な論文の中で、現象学の方法論に関わる三つの重要な「パラドックス」について語っている。それは概略次のようなものである。第一に、超越論的経験は、自然的態度の中で形成された概念によっては十全に規定できない。第二に、にもかかわらず、現象学者は自然的概念を表現するために形成された自然的言語によって超越論的経験を記述せざるをえない。第三に、自然的言語を用いることによって、還元によって世界を脱したはずの超越論的主観性が再び「人間」として世界の中に現れてしまう。『第六デカルト的省察』の中で、フィンクはこれらのパラドックスの源泉を、超越論的経験を記述するために特別に詠えられた「超越論的言語」をわれわれがもっていないという事実のうちに見て取っている。では、フィンクの言うように超越論的言語が存在しないとすれば、われわれはいかにして超越論的経験を自然的言語によって表現し、他者に伝達することができるのだろうか？

本発表の目的は、モーリス・メルロ＝ポンティの言語論をフィンクが提起したこの超越論的言語の問題（と発表者が呼ぶもの）に対する一つの応答として読み解くことで、哲学者のアンガジュマンという問題に言語論の観点から新たな光を投げかけることである。『行動の構造』や『知覚の現象学』のいくつかの重要な場面で、メルロ＝ポンティは当時未公開だった『第六デカルト的省察』を含むフィンクの諸著作に言及しており、メルロ＝ポンティの現象学理解にはフッサールと並んでフィンクの影響が色濃く見られるということはしばしば指摘される<sup>1</sup>。しかし、本発表で目指すのは、そのような「影響」関係の文献学的追跡ではなく、上記の問題への「応答」と呼べるような議論をメルロ＝ポンティの著作の中に読み取ることができるという仮説のもとで、メルロ＝ポンティの言語論を構成するいくつかの中心的テーゼを取り出し、組み合わせることで、そのような議論を合理的に再構成することである。

超越論的言語の問題は、「いかにして世界の中に現出した超越論的真理は他者に伝達されるのか」という問いと、「いかにして超越論的真理は世界の中に現出するのか」という問いの二つに分節することができる。前者の問いに対して後者の問いはより根源的である。本発表ではまず、『知覚の現象学』の理論的核心部である第三部を後者の問いとの関係で読み解く。この問いに対するメルロ＝ポンティ的回答は、一言でいってしまえば「時間が流れるこ

---

<sup>1</sup> e. g. Bryan A. Smyth, *Merleau-Ponty's Existential Phenomenology and the Realization of Philosophy*, Bloomsbury Academic, 2014.

とによって」である。しかし、この一見すると不可解な回答の意味を理解するには、時間性を主観性の構造そのものとみなし、時間の脱自作用を反省と自己変革の可能性と、時間の沈殿作用をフィンクなら「世界化」と呼ぶであろう作用と結びつけるメルロ＝ポンティ独特の主観性の理論を押さえておく必要がある。そのような確認を行なったうえで、われわれは第三部第一章「コギト」において提示される、主体が自らを知る究極の可能性は沈黙ではなく表現のうちにこそあるというメルロ＝ポンティの実践的な認識観を確認する。

本発表ではさらに、メルロ＝ポンティが四〇年代後半から五〇年代前半にかけて行なった文学をめぐる考察の中に、上記の議論が深化されていく過程を探る。よく知られているように、サルトルは『文学とは何か』の中で散文と詩を区別し、文学の実践によって読者に働きかける「参加 (engagement)」こそが散文の書き手の使命であると主張した。こうしたサルトルの主張に対して、メルロ＝ポンティは同年代に発表したいくつかの小文の中で、参加と並んで「離脱 (dégagement)」の契機の重要性を強調する。メルロ＝ポンティの文学論において、参加と離脱の対立はヴァレリーが「自尊心」と「虚栄心」の対立と呼んだ問題へと読み換えることができる。すなわち、自己の固有性を追求しようとするあまり独自の表現に固執して他者に理解されなくなるか、他者に理解されたいと欲するあまり凡庸な表現に終始して自己の固有性を喪失するか、という問題である。書くことに身を捧げる人間は、みな多かれ少なかれこのような二者択一に直面し、態度決定を迫られることになる。

メルロ＝ポンティは一九五三年に実施したコレージュ・ド・フランス講義「言語の文学的用法の研究」の講義準備ノートの中で、スタンダールの文学実践のうちにこのような二者択一を乗り越える方策を見出している。スタンダールが直面していた文学的課題とは、作家の主観性を、その鮮烈さを損なわずにいかにして読者に伝達しうるかということであった。そのためにスタンダールが到達したのが、メルロ＝ポンティが「間接的言語」と呼ぶ一連の表現技法である。それによってスタンダールは自己の追求と他者への伝達という相反する課題を同時に成し遂げることに成功した、とメルロ＝ポンティは主張する。

この「間接的言語」という概念は、単にスタンダールの個人的問題や文学に特殊的な問題に関わるものではない。それは、しばしば言われてきたように後期の「内部存在論」の鍵を握る概念であり、おそらくはフィンクが問いかけた「超越論的言語」のモデルを提供する概念でもある。本発表では最後に、このような見通しのもとで、メルロ＝ポンティの文学論から哲学の方法論について得られるであろういくつかの洞察を述べる。発表者の見るところでは、メルロ＝ポンティの文学論は、真理をただ観照する代わりに、真理との関わりを通して自己と世界を変革していくような哲学の可能性を素描している。